O-2

住環境が高齢要介護者のＡＤＬへ及ぼす影響

新潟医療福祉大学　社会福祉学科
岡田　史

1　目的

現在の介護保険で提供されるサービスは、利用者の選択に資するという理念を持ちながらも、現実には担当した介護支援専門員のケアプランによってそのサービスは決定されている。それによって、利用者の生活が決定されると言っても過言ではない。現在それらのサービスプランは真に利用者の様々な生活場面を考慮したものとなっているのだろうか。本研究は、生活を見る場合、住環境が利用者の生活にどのように影響を及ぼすか、いかに重要なものでるかを実感できた事例に遭遇したのでその事例をまとめ、考察することを目的とする。

2　方法

ある一人の要介護の女性の事例研究により、住環境が及ぼす生活への影響を明らかにする。

3　事例紹介

Ａ氏、女性８６歳、新潟の郊外の農家に生まれ、結婚しこれまで市内の一軒家で夫とともに暮らしてきた。2007 年の秋脳梗塞にて市内の病院に入院し、状態が落ち着いたことで右半身麻痺の障害を持ったまま退院となった。

入院中夫が肺炎で亡くなり、長男は離れて暮らしており、自宅での生活は一人では困難と判断されショートステイをロングで利用する施設生活者となった。

病院でのリハビリは平行棒での歩行は付添にて可能、立ち上がりは介助で可能であったが、日常生活においては、移動は車いす、食事は車いすに乗ったまま食堂で行っていた。ベッドの外ではほとんど車いすで過ごす日常であった。Ａ氏は筆者の夫の叔母にあたる人である。入院中や退院してからも頻繁に面会し、退院してからは車での送迎で家に招き交流する機会をもった。Ｋ氏を担当している介護支援専門員は、施設入所までの待機期間として、ショートステイをプランに立てていた。しかし、Ａ氏のニーズは自宅に帰って、元のように生活したいということであった。

4　経過

(1) 病院での状況

発症後安定したところでリハビリが始まったが、嚥下性の肺炎が心配される事態が続き中断されることが多かった。胃ろう造設を進められたが、口から食べ続けたいという本人の希望により、そのまま経口での食事が継続された。退院できる状況となったが一人暮らしは無理とのことで、介護支援専門員がショートステイを長期に利用するプランを立て、退院後ショートステイ施設利用となった。

(2) ショートステイ施設での生活の状況

筆者が訪問すると常にＡ氏は車いすに座ってぼんやりと過ごしていた。「立っていないと立てなくなると思って、ベッドにつかまって立ってみるのだけど、見つかるとやめなさいと注意される。」面会時はそのような会話が続いていた。

(3) 本人の要望から介護サービスの見学

「常に天井を見ている生活は、もうだめなんだろうかと思ってしまう。」「自分の家を人の集まる場所にして生活できないだろか。」「何とか家に帰れるようにしてもらいたい。」との話しから、外出時は介護サービスを見学することになった。

(4) 地域密着型小規模多機能型居宅介護見学

地域密着型小規模居宅介護は18年4月からスタートした新たなサービスである。その考え方はすでに福祉の先駆者によって実践されてきていたが、このたびの法改正のなかで、新たな介護保険のサービスとして位置づけられた。地域生活を支援する「通い、泊まり、訪問」が総合的に提供されるサービスである。

見学時は、利用者の皆さんが帰り支度をしているところであり、狭いため車椅子のまま建物の中に入ることができず、止むなく玄関から手引きの歩行介助を行った。

(5) 地域密着型小規模多機能型居宅介護利用へ

Ａ氏は先の施設見学後、何不自由のないがサービスを待っているだけの今の生活と、先に見学したサービスと比較して後者のサービスの方が歩けるようになる可能性があると話し小規模多機能居宅介護の利用者となった。

管理者が家に帰りたいという本人の意志に共感し、その方向でケアプランが作成され、最初は毎日泊まり、日中もその事業所で過ごした。が、ここでの生活になれれば日中だけでも家に帰るという見通しを立てていた。

ここでの生活は車椅子を使用することができない環境であった。また、地域密着型サービスは在宅生活を支えることを目的にしているので、敷居等のあるべき段差は必要と、バリアフリーのところにあえて段差を設置していたので、初日から歩く必要があった。Ａ氏は福祉用具貸与サービスで歩行器を借り歩いてみた。病院ではリハビリで平行棒の歩行を行い、ショートステイでは職員のいないところで立つ練習をしていたので、その日から見守りとわずかな介助があれば歩行器を使えるようになった。

現在、歩行器を使用しての歩行は安定している。昼間事業所から送ってもらって日中自宅で過ごし、夜は帰って寝る毎日を送れるようにまでなった。自宅では掃除や草取りをして気ままに過ごしている。

5　考察

現実に「家に帰りたい」という言葉に真剣に向き合うためには、生活場面のアセスメントは不可欠である。本事例は、住環境が本人の意欲を支えた事例であるということができる。小規模で狭い住環境であることが職員との距離を縮めて安心感を生み、また、車椅子が使えない環境は返ってどこにでももたれ、つかまることができ、安全な自立歩行を可能にした。